

第44回「城戸賞」応募作品

のら

○ 昭和十一年、春。太平洋戦争などまだ先の
日本。映画の都、京都で高井圭吾は脚本の修
行に励んでいた。師の大石玲司は映画界随一
の人気脚本家であり、映画を単なる大衆娛樂
から芸術にまで高めたと評されている。一番
弟子である高井は第二の大石玲司としてデビ
ュ―近しと目され、弟子の背川や福本から
尊敬も集めていた。輝かしい人生を約束され
たかと思われていた。高井の前途。だが、使用
人として新たに雇い入れた野田の登場に
より、野良猫のように、なにを考えているのか
から、自由奔放な野田はのらりと呼ばれた。学
も教養もないことを背川たちに馬鹿にされた。書
のらは、見返してやらんとばかりに脚本を書
き、芸術性からは程遠いが、お涙頂戴で戦争を
賛美した脚本では、大石は、大ヒットを連発。あ
つという間に大石を抜く大脚本家となる。映
画界はヒットを狙い、福本の真似をした作品
が大流行。便乗した福本までも高井よ
り先にデビュー性を遂げる。一方、高井は師匠
に倣った文学性のある脚本にこだわら
ない。自信を失った高井に更に追い打ちがかけら
れる。大石までもが信念を捨て、のらの真似
をして戦争賛美の脚本を書き上げたのだ。尊
敬する師の変わりように逆上した高井は大石
を殺害してしまふ。昭和も終わりに近づいた頃。大
石殺害の罪を逃れた高井は、戦後、反戦映画
の脚本家として成功をおさめていた。京都を訪れ、
た高井は背川と福本とも久々の再会を果たし、
過去の良き思い出を避けることにはできなかつた。
あう苦い記憶を避けることにはできなかつた。
あの時代は何だっただのか。果たして自分たち
は、何を成し遂げたのか。

○ 「のら」 登場人物表

たかいけいご		
高井圭吾	(25)	大石の一番弟子
おおいしれいじ		
大石玲司	(48)	人気脚本家
おおいしきみこ		
大石公子	(17)	大石の一人娘
せがわしゆんすけ		
背川俊介	(24)	大石の二番弟子
ふくもとたかし		
福本孝史	(23)	大石の三番弟子
にしおかきよ		
西岡キヨ	(60)	大石家の女中
うしおせいきち		
牛尾清吉	(72)	大石家の使用人
とまりりゆうたろう		
泊隆太郎	(50)	日映 京都撮影所 所長
いそむらやすあき		
磯村保明	(52)	日映 京都撮影所 脚本部 部長
きたはらえいいち		
北原栄市	(55)	東亜映画 社長
ぬまさわゆたか		
沼沢豊	(34)	帝塚山映画 脚本部 部員
たかいだいご		
高井大吾	(28)	高井の兄
のだへいさく		
野田平作	(25)	大石家の新しい使用人

○

破れた障子紙
猫一匹通れる大ききの穴。

時は昭和十一年の春。
鴨川を北へとあがった上
ところ。賀茂のほとり。のどかな農村にある大きな
屋敷。大石家の縁側である。

高井
猫の「のらー」

高井圭吾（25）が四つ這いになった人の影。

高井
のらを探している。

庭木の茂みの間から、同じく四つ這いにな

背川
「あきませんわ。福本、そっちは？」

床下から、こちらも四つ這いになった福

本（23）が現れる。
すすまみれで真っ黒になった顔を横に振り、

福本
「おりません」

高井
「いや、おった。黒猫が」

背川
「おりましたね。でかいのが一匹」

福本
「堪忍してくださいよ。僕はちゃんとした人間ですよ」

と、二人、声をあげて笑う。
猫のしぐさを真似て顔のすすをぬぐってみせる。

高井
「こりやええ」

背川
「先生に見せたげたいわ」

高井
「福本君、君は脚本家より役者の方が向いているようですね、なんて言われるや

ろな」

背川
「高井さん、似てますわ。先生、そっく

福本
「ほんまや。ハハハ」

三人、声をあげて笑う。

女中のキヨ（60）が漬け物の瓶を抱え

て通りかかる。
忌まわしい顔で障子の穴を見て、

キヨ「またですかいな」
 高井「ああ。逃げてもた」
 キヨ「ほんまに恩知らずなんやから」
 背川「勝手に家に入ってきて住み着いたと思
 うたら、ぷいとどこかへ行ってしまうんや
 からな」
 福本「所詮、畜生なんですよ。ま、恩を知ら
 んから畜生なんやろけど」
 キヨ「先生も悪いんですよ。すぐに追い出せ
 ばええもんを：野良猫を飼いならそうなん
 て無理やて私が言うてますのに：」
 高井「先生はええ人やから仕方ないわ」
 キヨ「そうですかねえ」
 高井「決まってるやないか。そやから次から
 次にここに来るんやろ」
 キヨ「高井たちを見て、
 キヨ「高井たち、意味がわからない。
 キヨ「ちゃんど汚れをとってから家にあがつ
 てくださいよ」
 背川「家の裏へ去って行く。
 背川「のら、今回の何代目や？」
 福本「僕が去年、弟子入りしてから飼うた野
 良猫は三匹で：」
 背川「俺が一昨年、弟子入りしたあとは四匹
 やつたな：」
 高井「三年前に俺が弟子入りしてからとなる
 と：十二匹目やな」
 福本「次の十三代目ですか」
 高井「となると、中村屋の欽次郎より上にな
 るな。欽次郎は十二代目やからな」
 背川「こりや、きつと大した役者が来ますよ」
 福本「名作になりますわ。脚本にして撮影所
 に売り込みましよ」
 背川「となると、題名やな」
 福本「どんなんがええでしようね？」
 高井「決まってるやないか」
 背川「と福本、声を揃えて、
 「え？なんですか？」
 高井「のら」

背川「そりやええわ。ハハハ」
三人、声をあげて笑う。

○ 大石家の裏庭

裏山の竹林と面しており、京野菜が紐で

吊られて干してある。

キヨ「やつて来る。」

使用人の牛尾(72)が薪を割っている。

キヨ「物置へ瓶をしまつてから、煙草を

取り出し、一服する。」

吸っている煙草を牛尾に差し出す。

牛尾「ひとつもらい、再び薪割りに。」

キヨ「今年花冷えがきつおすな」

牛尾「そうやな」

キヨ「ま、おかげで漬け物のつかりも良くな

るといふものやけど」

牛尾「そうやな」

キヨ「楽しみですな」

牛尾「そうやな」

猫が一匹、ふらりとやつて来る。

キヨ「のらやないの。あんた、おったんかい

な」

キヨ「のらを抱こうとするが、するりと

逃げられる。」

キヨ「表に行きなさいな。みんな探してたで」

のら、牛尾に近づく。

キヨ「のら、危ないで。あっち行き」

のら、牛尾の足もとへ。

牛尾「手を止め、蹴飛ばそうとする。」

牛尾「あっち行け。シッシッ」

のら、離れる。

牛尾「薪割りに戻る。」

のら、積んである薪の上へ。

牛尾「アッ！コラッ！」

薪の山が崩れる。

牛尾「斧の柄でのらを小突く。」

のら、にやあと声をあげて逃げる。

牛尾「薪の山を積み直す。」

のら、離れたところで見逃している。

足もとに転がる一本を見逃している。

薪割りに戻った牛尾、斧を振り上げた時、
転がる薪に足をとられて倒れかける。

キヨ「！」

牛尾「薪に気づいて難を逃れる。」

キヨ「おいつげんと。転んで頭でも打ったら

おごとや」

牛尾「こないなことで死ぬかいな」

キヨ「そんなんわからへんがな」

牛尾「ワシ、百まで生きるて、占いで言われ

とるんや。余計なお世話や」

キヨ「さよか：縁側の戸の障子破れとるさか

い、早いうちに貼り直してといてや」

牛尾「へいへい」

キヨ「：なんやあの言い草：死んでまえ：」

と、ぶつくさ言いながら表の方へ戻る。

牛尾、黙々と薪割りを続ける。

のらがじつと見ている。

牛尾、春の陽光の中、いい汗を流して心

地よさそう。

牛尾「ええおひさんや。極楽極楽」

喉が渴き、井戸で水を汲む。

ごくり、とおいしそうに飲み干す。

ふう、と息をついたところで立ちくらみ。

よるめいた牛尾、頭から井戸の底へ落ち

る。

のら、井戸のへりへ。

中をのぞきこみ、にやあと鳴く。

首の骨を折って死んでいる牛尾。

鳴き声が井戸の中で共鳴する。

のら、ぷいと立ち去る。

○ 破れたままの障子紙 時間経過

○ 大石家の客間 日映脚本部の部長、磯村（52）が原稿

に目を通している。

その前に大石（48）。

隣の部屋の襖の隙間から背川と福本が覗

き見ている。大石の娘の公子（17）がお茶のお代わ

大石の娘の公子（17）がお茶のお代わ

つたいないんとちがいますか。先生の作品で女優デビューさせたらええ思うんですけどねえ」

大石「公子はまだ学生です。それに彼女自身、学究の徒として将来を考えているというのとですからねえ」

磯村「はー、すっかりしてますな。先生も心配無用というわけですな。しようもない男に手えつけられることもなさそうや」

大石「(話題を終わらせようと)娘はそういうことには興味がないようですねえ」

磯村「(察し)しかし、先生の脚本は読みやすうて助かりますわ。私、最近、老眼がきつなつてしてもて文字読むんが辛いんですわ」

大石「それだけは私の力じゃありませんねえ」

磯村「では、この原稿の清書も高井君が？」

大石「はい」

磯村「ほー、先生の字とそっくりですな」

大石「彼も几帳面な人ですから」

磯村「さすが先生の一番弟子ですな。で、未来の大脚本家はどちらに？」

○ 裏庭

高井、薪割りをしている。

磯村が来る。

高井「磯村さん、おつかれさまです」

磯村「新しい使用人、まだ見つからへんのやね」

高井「どこも人手不足みたいで。どこの馬の骨ともわからん人間を雇うわけにもいかんやろし」

磯村「高井君、そんな悠長なこと言うてる場合やないで。脚本、進んどの？」

高井「いや、この通りで。僕ら弟子が当番でやつてる次第ですわ」

磯村「薪割りで手に豆作つとる場合やないで。君が作るんは筆のタコや」

高井「僕かてそうしたいんですけど」

磯村「貸してみ」

磯村、高井の斧を借り、薪を割っていく。

高井「うまいもんですね」

磯村「そりやからね」

高井「やないからね」

磯村「ボンボンやないですよ」

磯村「ふうん。ま、それはええわ。我が社と

しては、第二の大石玲司として華々しくデ

ビューさせようと思ってるんや。君は見た目

もええしな。これからの映画界が必要とし

てるのは高井圭吾の脚本なんや。頼みまっ

せ」

高井「はい！」

磯村「井戸を見て、

磯村「それはそうと、牛尾のじいさんの四十

九日て終わったんかいな？」

高井「一昨日やったそうです」

磯村「さよか。人間であっけないもんやな」

高井「ほんまですね」

磯村「井戸に落ちたぐらいで死ぬもんなんや

な」

高井「頭の骨もへこんでたそうですわ」

磯村「じいさんて独り身やったんよな」

高井「引き取った孫娘がいるそうです」

磯村「そうなん？知らなんだ」

高井「僕らもですわ。なんや生まれた時から

体が弱うて、世話が大変らしいですわ」

磯村「うわ、この先どうするんやろな」

高井「どないするんでしようね」

磯村「話題を打ち切るように薪を割る。」

○ 京都 西陣 時間経過

○ 小路に並ぶ連れ込み旅館。
青年将校と行った風の軍服姿の男が女を
連れて入って行く。

○ その一室

素っ裸の公子が脚本を読んでいる。
同じく裸の高井が煙草を吸い、情事の余
韻に浸っている。

高井「公子、脚本を読み終える。」

公子「ええんとちゃうかなあ」
高井「ええってどうええの？」

返答に困った公子、高井の煙草を奪い、
ひと口ふかしてから、

公子「ようできてるってことや」

高井「そうか！できてるか。ほな、あとひと
押しやな」

公子「なんや。それで完成してるんとちゃう
の？阿呆くさ」

高井「脚本いうもんは、書いては直す。それ
が肝心なんや」

公子「大先生も褒めてくれてるんやろ。うち
の感想なんかいらんやないの」

高井「プロの意見も大事やけど、一般の意見
も大事なんや。（大石を真似て）映画は芸術

だが、客商売だということも忘れてはいけ
ませんねえって先生も言うてるしな」

公子「ほんまよう似てるわ。気色悪う」

高井「（満足そうに）そうか」

公子「字もそっくりやしな」

高井「（大石を真似て）私のような脚本家にな
るには、内容や文体だけでなく、文字の一

つに至るまで見習わないとねえ」

公子「いややわ。なんか父親と関係してるみ
たいな気持ちやわ」

脚本が皺苦茶になり、散乱する。
破れたままの障子紙 時間経過

○ 大石家の調理場
キヨが料理を作っている。

器に盛られた煮物や焼き物などなど。

○ 大石の書斎
静寂の中、大石が鉛筆を原稿にすべらせ

る音だけが響いている。

○ 高井の個室

高井、大石そっくりのたたずまいで脚本を執筆中。

○

背川と福本の部屋。
背川、なかなか筆が進まない。
福本、筆を持ったままこくりこくりと居眠りをしている。
そこへキヨの叫び声。
福本、驚いて目を覚ます。

○

廊下
高井が部屋から出て来る。
向かいの部屋から背川と福本が出て来る。
なにごとかと顔を見合わせる三人。

○

調理場
高井、背川、福本が駆けつける。
キヨが腰を抜かして座り込んでいる。
器に盛られていた料理が散乱している。
食い散らかしたような魚の骨。

高井

「どないしたん？」

キヨ

「ね、猫：大きな猫：」

高井

「猫？」

キヨ

「物置に醤油をとりに行つて戻つてきたら、(両手を広げ)こないな大きな猫が料理を食い散らかしてたんですわ」

背川

「そないな大きな猫おるかいな」

キヨ

「嘘言いますかいな。もう、そりや素早うて」

○

客間
大きな猫の足跡のような汚れが点々と。
襖が倒れている。
飾つてあつた掛け軸が破れ、像も壊れて倒れている。
呆然とした大石が仰向けに転んでいる。
高井、背川、福本が駈けて来て、
三人「先生！」
大石を起こそうとする背川に、高井、割

つて入り、大石を支える。

高井「大丈夫ですか？」

大石「猫だ：大きな猫：」

背川「先生までそんなこと言わんといてくだ

さいよ：そんなもんおるわけないでしょ」

高井「口を慎め。先生が間違ったこと言うわ

けないやろ」

背川「そやけど：」

大石「あそこ、奥の襖を指し、声をひそめて、

三人、緊張してごくりと喉を鳴らす。

キヨがほうきやはたきを持って来る。

高井、ほうきを受け取る。

背川、はたきを受け取る。

福本、ほうきを受け取る。

短いはたきに不安になった背川、福本に

はたきを押しつけ、ほうきを奪い取る。

△武装した三人、襖を開ける。

その瞬間、黒い大きな影が飛び出す。

背川「ギャーッ！化け猫っ！」

福本、腰を抜かして床に座り込む。

福本「あっちですよ」

と、先陣を切って走って行く。

慌ててついていく高井。

背川はまだ尻をついていている。

○庭

高井がやって来る。

福本が男を地面に押さえ込んでいる。

大石、背川、キヨがやって来る。

福本「これが化け猫の正体ですよ」

福本、男の髪をつかみ顔を上げさせる。

野田平作（25）である。

一同、薄汚れた野田の顔をまじまじと見

る。

野田、太々しい顔にうっすらと笑みを浮

かべる。

○大石家の門前

警察の自転車が一台止まっている。
野次馬と化した近所の百姓たち。

○庭

生垣から覗き見している野次馬の群。
野田、紐でくくられて地面に座り込んで

いる。
大石家の人間、警官の取り調べに立ち会

つている。

警官「名前は？」

野田「野田」

警官「のら？」

野田「高井、背川、福本、ぶつと笑う。」

警官「のだ。野田平作」

野田「年は？」

警官「知らん」

野田「バカにしとるんか。年を知らんわけな

いやろ」

野田「二十五：二十五：ぐらいやろ：」

警官「二十五と：で、職業は？」

野田「(失笑し)そないなもんあったら、こん

なことをするかいな」

警官「そりやそうやな。無職と：では、住所

も不定というところやな」

野田「そや。おっさん、わかっとなるがな」

警官「こら！調子に乗るな！」

警官「野田の頭を小突く。」

キヨ「この人、刑務所に入れますのやろ？」

野田「入れるんやったら、飯のうまいとこに

入れてや」

警官「それはないわな。留置場でしばらく反

省させるぐらいやろな」

野田「なんや。ケチくさ」

高井「先生の大切な骨董品も壊されたんです

よ！どれもこれも値段のつけようもない品

なんですよ」

野田「形あるもんはいつか壊れるもんやで」

高井「こいつ！ふざけやがって！」

警官「それでしたら、先生の方から告訴なり

高井「先生！やりましょう！」
大石「では、そういうことで！」

と、大石が言いかけたところに新聞記者
がやって来る。
カメラマン、おかまいなしに写真を撮り
まくる。

記者「京都日報の者ですが、天下の大脚本家、
大石玲司の家に入った大泥棒というのはこ
いつですか？」

大石「：ああ：」
野田「男前に撮ったってや」

記者「耳に入れたところ被害がすごいという
ことですが、やはり告訴されるんですか？」

大石「：それは：」
野田「そうや。天下の大石が残飯あさっただ
けの男を刑務所にぶち込むんや。派手に書
いてやってや。情け無用てな」

一同、大石の返答に注目する。
大石「：今回のことはなかったことにしてい
ただけませんか？」

警官「先生がそうおっしゃるなら」

大石「君、仕事を探しているのか？」

野田「そうや。ただいま求職中というやつや」

大石「うちで使用人として働かんか？」

野田「あんまり面白そうな仕事やないな」

大石「手当もちやんと出す」

野田「まあ、考えてもええかな」

キヨ「先生！」

背川「先生、やめた方がいいですよ」

福本「そうですよ。こんなどこの馬の骨とも
わからん奴を」

背川「それにこいつ反省しとらんし」

野田「こいつってなんや。ちゃんと野田って
名前があるんやで」

大石「高井君はどう思う？君も反対か？」

高井「賛成です。犯罪者にも情けを与える慈
悲の心は先生の作品そのものやと思います。

この高井圭吾、感銘を受けました」

大石「では、この男は私が責任をもって引き
取るというところで騒動をおさめたいと思

記者「これは美談や！さすが天下の大脚本家、
大石玲司や！ええ筋書きよるわ！」
おだてられて嬉しそうな大石。
カメラマン、大石家の面々と野田の集合
写真を撮影。

○ 調理場 その夜

食後の洗い物をしているキヨ。
高井、背川、福本は手伝うこともなく、
座って話し込んでいる。

キヨ「あの人、大丈夫やろか。寝首かくよう
な真似せんやろか」

福本「とんだ十三代目が来ましたね」

背川「十三代目でなんや？」

福本「忘れたんですか？のらですよ」

背川「のら？！」

と、しばらく考えを巡らせてから、プツ
と吹き出す。

背川「そやな。のらや。確かに十三代目や」
キヨ「また、かわいがない野良猫、拾ったもん
ですわ」

福本「おまけに口も汚いし」

背川「高井さんも高井さんですよ。ちよつと

は先生に反対してみたらよかつたのに」

高井「そう言うなや。おかげで風呂炊きもせ

んでええし、雑用から解放されたやないか。

先生もよう言うてるやないか。物事の悪い

面ばかり見てたらあかんて」

背川「そら高井さんはまだよろしいですわ」

高井「なんでや？」

背川「デビューも近いし、それが成功したら

ここ出て行きはるでしよ」

高井「ま、そらそうやけど」

福本「そうですわ。僕ら、まだまだ先の話で

すからね」

背川「僕らでどういふことや。俺はおまえよ

り先やで」

福本「おっしゃる通りで」

背川「とりあえずしばらくは貴重品もちやん

と肌身離さんとおくことやな」

野田「一同、賛同してるところへ、

一同、驚いて声のした方を見る。

誰もいなかったはずの勝手口に野田が立

野田「先生、風呂終わりましたで。次の人入

ったってくださいな」

一同、虚をつかれて言葉をなくしている。

野田「おぼちやん、お吸い物、ちよつと出汁

ききすぎやで。もうちよつとおさえんとな

あ「キヨ「あれはのらやない！どらや！どら猫

や！」野田の高笑いが響いている。

○ 神戸 初夏

小高い丘から広がる須磨の浦。

山手の上空から海へと戦闘機の連隊が飛

んで行く。

その先には軍艦が並んでいる。

○ 寺のお堂

法事中。

参列者の中に高井。

○ 料亭の座敷

法事の参列者が豪華な料理に舌鼓を打っ

○ 料亭の中庭

高井の兄の大吾（28）が煙草を吸って

いる。

高井「立派な法事やったな。親父も喜んで

る。便所で用を終えた高井が通りかかる。

大吾が煙草を差し出し、高井も一服。

わ「

大吾「そやろか」
高井「こないな豪勢な店まで借りて。えらい
かかったやろ。うちの会社、大丈夫なん？」
大吾「おまえに心配してもらうほど困ってな
いわ」
高井「そうなん？去年の法事は近所の食堂の
仕出しで済ませたやないの」
大吾「おまえはなんもわかってないんやな」
高井「どういうことや？」
大吾「今年に入ってから軍の発注がどん
増えとるんや。この店の二軒や三軒買える
ぐらい儲かっつるわ」
高井「戦争様々やな」
大吾「そういうこつちや」
高井「それやったら頼みやすいわ」
大吾「しゃあないやちやな」
大吾、財布を取り出し、札ビラを渡す。
高井、両手を合わせて拝んでから札ビラ
を受け取る。
大吾「映画みたいなやくざな仕事、そろそろ
見切りつけて帰ってこんかいな」
高井「大丈夫やって。もうすぐデビューして
名前も売れそうなんやから」
大吾「そう願うわ」
高井「なんや疑つとるんかいな」
大吾「おまえどうせ小難しいもん作つとるん
やろ。そんなん売れへんで」
高井「高尚なもんで言うてほしいわ」
大吾「高尚なだけでは世の中、通じんで」
高井「俺が通じさせてみせるがな」
大吾「おまえの先生みたいにか」
高井「そうや」
大吾「あの人の映画観たけど、俺はようわか
らんわ。寝とる客ばかりやっただ」
高井「そんな疲れとつただけや」
大吾「ちやんと世の中の流れをつかまんとあ
かんのとちやうか」
高井「わかつたようなこと言わんといて」
大吾「映画も商売やろ。商売やったら俺にも
わかるで」

高井「どうわかるん？」

大吾「映画会社も資金を集めなあかんわけや。となると、資金を集めやすい商売をするんが一番てつとり早いわけやな。儲けることも肝心やけど、まずは支度金や」

高井「じゃあ、どういのがええ言うんや」

大吾「そうやな。たとえばやで」

高井「うん」

大吾「戦場に駆り出される息子を涙をこらえて見送る母親の話とかどうや」

高井「お涙頂戴かいな？」

大吾「そうや。最高やないか」

高井「そんな軍隊の宣伝みたいな映画作れるかいな。節操ないわ」

大吾「だからおまえはわかってない言うんや」

高井「どういうこっちゃ」

大吾「仕事に節操なんてあるわけがないがな」

高井「阿呆くさ。兄貴に映画のことがわかってたまるかいな」

大吾「さよか。ま、精進しいや」

と、座敷に戻る。

高井、煙草をふかす。

○ 貼り替えられた障子紙 時間経過

○ 大石家の客間

東亜映画の北原社長（55）が大石に土下座している。

大石「社長、頭をお上げください」

北原「（下げたまま）この通りです」

大石「困りましたな」

と、口とは裏腹にどこか嬉しそう。

北原「この北原。映画産業に携わる者として、先生の作品を扱えんようでは、世間に顔向けできませんのや」

大石「（悪くない）……」

北原、顔を上げ、

北原「死ぬまでには是非とも先生の作品を手掛けたいと思えますのや。いや、できるもんやったら腹切る覚悟ですわ」

大石「大げさですな」
北原「是非！」

北原「再び土下座に戻ると、懐から布の包みを大石の膝元にそっと突き出す。」

大石「ま、包みを懐にしまい込み、
北原「ま、検討してみましよう」

北原「顔を上げ、

大石「ありがとうございます」

大石「良い返事をお出しできるかわかりませ
んよ。日映さんとの問題がありますからね」

北原「それはもう承知の上で」

大石「日映さんの方では、私の作品で最低三
年は番組を組んでいられるということですよ」

北原「そうですね」

大石「ま、先のことにはゆっくりと話し合えば
良さそうですね」

北原「そうですね。近い内に祇園で腰を据え
て話しましょうや」

大石「悪くないですねえ」

北原「今日のところは失礼します。では」

と、北原、折目正しい作法で退室する。

大石、先ほどの包みをほどき、札束を勘
定する。

○ 大石家の門前

北原が出て来る。

歩いて来た磯村と鉢合わせる。

磯村「これはこれは。北原社長やおまへんか。

相も変わらずお百度参りですかいな。社長
自ら大変ですな」

北原「大石玲司の脚本が手に入るんやったら、
百でも千でも詣でてみせるわい」

磯村「商売繁盛願うなら恵比寿さんにでも詣
でた方がええんとちやいますか」

北原「うちの会社にはえべっさんより大石様
や。今に見ときや。うまいことやったるか
らな」

磯村「見物させてもらうとしますわ。では」

と、磯村、中へ入って行く。

北原、待たせていた高級車に乗り込み走

り去って行く。

○調理場

野田が昼食をとりながら磯村に話を聞かせている。磯村、和菓子をつまみながら茶をすすつていっている。

磯村「いやー、あんたの話、ほんまにおもしろいな」

野田「そうかいな？」

磯村「その若さで、それだけいろいろ経験して大したもんじゃない」

野田「好きでやっつとるわけやないんやけどな」
磯村「どや？その体験を脚本に書いてみいひんか？」

野田「そないなもん、俺に書けるわけないやないですか。無理無理、わけわからんもん」
磯村「さよか。もったいないな」

高井たちが食べた食器をキヨが運んで来る。

野田「野田、自分の食器をさつと洗い、

野田「さ、そろそろ俺の仕事に戻りますわ」

キヨ「なんや、のら。もう仕事かいな」

野田「今日中に済ませんと明日から天気悪なりそうやしな」

キヨ「お茶、入れたる思てたのに」

野田「ごめん。そや、今日のみそ汁、うま

かつたで」

キヨ「さよか。ちよつと具の加減、おかしな

野田「いやいや。ほんまうまかつた。ごちそ

うさん」

キヨ「今日の晩ご飯な、あんたの好きなあじ

の干物用意したるからな」

野田「嬉しいな。ありがと。がんばれるわ。

ほな、磯村さん、失礼しますわ」

キヨ「ええ、ウキウキして洗い物を始める。

磯村「ほんまに」

磯村「苦勞人みたいやな」

キヨ「そやねん。そういうところがこの阿呆
ボンらとちごて親しみがもてるんよ」
磯村「いろんな仕事やつてみたいやな」
キヨ「布団の打ち直しもできるし。畳の張り
替えもできるしな。ほら、あれ」
キヨ「屋根の上からとんと金槌を打つ音。
にできるんは鉛筆削るぐらいやのにな」
磯村「キヨさんにはかなわんな」
キヨ「磯村さんが食べてるそのお菓子もら
が作ったんやで」
磯村「なんや、これ、買うてきたもんやない
の？」
キヨ「和菓子屋で奉公してたんやて。料理も
うまいしな。大したもんやで。娘がおった
ら婿にもraitたいぐらいや」
磯村「えらい変りようやな」
キヨ「誰が？」
磯村「キヨさんやがな。最初はえらい煙たが
つとつたやないか」
キヨ「そうやったかいな」
磯村「和菓子を頬張り味わう。
とんとんと心地よい音が響いている。」

○ 高井の部屋

脚本の執筆中の高井。

○ 金槌の音にイライラ。
なんとか作業に集中しようとするが耐え
られず、原稿用紙に八つ当たり。
背川「外から背川の声が聞こえてくるか」

○ 庭

○ 背川と福本が屋根の上の野田に怒ってい
る。
背川「やって来た高井、物陰から見物。
か」

野田「作業やのうて昼寝やないのか」
福本「なんやて？降りてこい」

野田「降りたらどないするねん？」
福本「ぶちかましたるわ」
野田「さよか」
と、猫のごとく飛び降りる。
背川「ほな、ぶちかましてもらおか」
野田「やったるわい」
福本の攻撃を野田、ひらりとかわす。
背川が野田を後ろから押さえつける。
福本が野田を殴る。
高井、頃合いを見計らって駆けつける。
高井「やめ、やめ。なにやっとするんや」
背川「こいつが生意気言いよるんですよ」
福本「こらしめてやっとするだけですよ」
高井、野田を起こしてやる。
高井「おまえらの気持ちもわかるけど、やりすぎや。のらもちよつと気をつけんとな。先生も仕事中や。邪魔になるわ」
野田「先生の名前出しよるけど、高井さんが邪魔や思てるだけやないの」
高井「なんやて？」
野田「俺は先生に頼まれて修理してるだけや」
三人、言葉に詰まる。
野田「そもそも俺は先生に雇われとるんや。あんたらやないで。偉そうに指図される義理ないわ」
三人、返す言葉がない。
野田「あんたらプロ目指してるんやろ。あれぐらいで仕事できへんようなら諦めたほうがえええで」
背川「なんやて！おまえになにがわかるねん！」
福本「脚本書くんがどれだけ大変か、おまえみたいなもんにかかってたまるかい！」
野田「そんなもん、屁こいても書けるわ。なんぼでも書いたるわい」
背川「無理無理、おまえ学校も出てないんやろ」
野田「出とるわい」
福本「どうせ小学校やろ」

野田「それが悪いんか！」
背川「俺らは大学出てるんやで。こちらの高
井さんなんて京大や。わかるか？京大やで」
野田「わからんけど、売れもんちま
ま書いとらんや。どうせ大したとこやない
やろ」
福本「なんやと！」
背川が野田をはがいじめにし、福本が殴
りつける。
高井、ざまみろと傍観している。
バシヤツと水がかけられる。
一同ずぶぬれになり、騒動が収まる。
キヨが空になった桶を抱えている。
その隣にはあきれた様子の大石。

○

居間
大石を前に正座して並ぶ高井、背川、福

大石「おまえたちの気持ちもわかる。しかし
な、暴力はいかん暴力は。暴力で解決でき
るものはない、と私は脚本で示しているは
ずだ。それを弟子のおまえたちが理解して
いないのでは私の立場がないではないか」

弟子たち三人そろって、

「すいません」

高井たちと離れてあぐらをかいている野
田は「ずつとうつつむいている。おまえはどうしてそう

喧嘩ごしなんだ」

野田「：：」
大石「大人しいな。言いたいことはないの

か？」

野田「：先生：」

大石「なんだ？」

野田「脚本を教えてもらえませんか？」

大石「ほう」

背川「やめとけやめとけ。字も書けんやろ」

福本「恥かくだけやぞ」

大石「おまえたちは黙っていなさい」

背川と福本、沈黙。

大石「脚本というのな、おまえが思うほど簡単なものではないのだよ。」
野田「それは百も承知ですわ。でも、先生は日本が一番すごい脚本家なんやろ？ いうたらお釈迦様みたいなお人やないですか。そんな人やったら、俺みたいな学のない人間でもうまく手ほどきできるもんじゃないままつか？」

大石「しばらく思案してから、

大石「高井君」

高井「はい！？」

大石「のらに教えてあげなさい」

高井「私がですか？」

大石「人に教えるのも勉強だよ」

高井「私はデビュ―作の方がまだまとまって

いないんですけど：」

大石「煮詰まった時には距離を置くことも大

切だよ。いいね」

高井「わかりました」

野田「嬉しそうに高井を見ている。」

○ 高井の部屋

進まぬ様子で原稿用紙と鉛筆を用意してやっっている高井。

野田はぎっしりと詰まった本棚を物色している。

高井「これ、全部読んだんでつか？」

高井「まあな」

野田「脚本で、これだけ読まんと書けませんの？」

高井「これだけでは足らんわ。処分した本は

倍からあるからな」

野田「はー、大変そうやな」

高井「おまえ、ほんまに字、書けるんか？」

野田「書けますがな。奉公先で料理の品書き

書いてたんでっせ」

高井「じゃ、文字も読めるんやな」

野田「当然や。魚市場で働いてた時、帳簿や

発注書に目を通してましたからな」

高井「そうか」
野田「で、脚本ていったい何ですか？」
高井「なんやおまえ、知りもせんと書くとかぬかしたんか」
野田「全然知らんわけやおまへん。小説みたいなもんでっしやる」
高井「映画って知ってるか？」
野田「馬鹿にせんといてくださいよ。観たことありますかな」
高井「その話を考えるんが脚本家なんや」
野田「はー、そないな風にできてますのか、映画って」
高井「タイトルのと、脚本だれそれってちやんと出てるやろ」
野田「あつたかなあ：そんなん誰も観てませんやろ」
高井「まったく：しゃあないやつちやな」
高井「高井、大石の脚本を何冊か出し、高井を通して書き方を覚えるんや」
野田「なんやめんどくさそうやな」
高井「おまえなあ！」
野田「冗談、冗談」
高井「まったく：」
野田「高井さん、あんたええお人やな」
高井「先生の命令に従うてるだけや」
野田「高井さんはなんで脚本、書こうと思いましたんや？」
高井「どういうことや？」
野田「だから、なんか目的がおますのやろ？金とか出世とか」
高井「そんな急に聞かれてもなあ」
野田「なんかありますやろ」
高井「書いて言うたら、先生みたいな脚本を書きたいて思ったことかな」
野田「あの人がそんなにすごいんでっか」
高井「おまえが読んでわかんやろけど、先生の脚本には人間の理想いうんか、人間社会の希望みたいなもんがあるんや」
野田「へえ」

高井「ま、そんなとこやな。俺の目的は」
野田「良かったですな」

高井「え？」
野田「そろそろデビューするんでっしやる。

夢が叶うてもんやないですか」

高井「そやな：ありがとう：」

野田「道具や脚本を抱え、」

野田「ほな、これ借りて行きますわ。またわ

からんことあつたら尋ねますんで、よろし

うおねがいます」

と、出て行く。

高井「あいつ、悪い奴やないんかもしれへん
な：」

○ 大石家の裏庭 夏

軒下の日陰には、水をはった桶で冷やし
たなすやきゆうりやトマト。

○ 庭

日陰で公子が小説を読んでいる。

屋根の修理をしている野田、時たま手を

休めてちらちらと公子を見る。

視線に気づいている公子、わざと足もと

をめぐって見せつける。

野田、手を止めて見とれる。

公子「なに、見てるんや！スケベ」

野田「！俺、見てませんよ：」

野田、慌てて背を向け、仕事に戻る。

公子、悪戯心に満足し、小説に戻る。

○ 客間

大石が日映の泊所長（50）を接客中。

泊 「来年の春の特別興行、ウラケンが忠臣

蔵でいきたい言うとるんよ」

大石「監督の意向はわかるんですが、私とし

ては現代もので考えているものでして」

泊 「ワシは当たればどっちでもかまわんの

やけどね、ま、ご時世ちゅうかね、満州あた

りの動きを見とつても、なんかね、理屈めい

たもんは客が離れよると思ふんよ」

大石「所長がそうおっしゃるなら、考慮してみますが」

泊「無理は言わんよ、ワシは。あ、そうそう。君ンとこ、ええ弟子が入ったそうやないか」

大石「？高井君のことですか？」

泊「あの子のことやないで。あの子知ってるもん、ワシ。ミケとか言いよったかな」

大石「ひよつとして、のらですか？」

泊「それやそれ。のらやがな。あとひと息でデビューできるぐらい力あるて磯村が言うてたで。君、知らんかったんかいな」

大石「まさか。彼なら私も期待してるんですよ」

泊「そやろな。将来のある若者がそろつたら君も鼻が高いやろ。ハハハ」

大石「まったくです」

○ 裏庭 夕方

のらが薪を炊いて風呂を沸かしている。

○ 大石の書斎

高井が原稿をめくっている。

その面白さから興奮を抑えようとするが、
どんだんペースがあがる。

読み終え、ふうと息をつく。

高井「これをのらが？」

大石「私も驚いたよ」

高井「先生が書いたんやないんですか」

大石「私の文体に似ているが、真似じゃない」

高井、啞然と原稿を眺める。

大石「君はまったく知らなかったのか？」

高井「知るもなにも、なんも尋ねてこないもんやから、てつきりあきらめたんやと思てました」

大石「磯村君に見せては助言をもらっていた
そうなんだよ。磯村君もすっかりの才

能に惚れ込んでいたみたいでね」

高井「ま、これだけ書いたら大したもんやと思
いますけど」

大石「君も気を引き締めないとな」
高井「どういうことですか？」
大石「磯村君曰く、君とのらはデビューを争うライバルだそうだ。日映としては、脚本にあともう一つインパクトをつけることが出来た方をデビューさせるそうだ」
高井「顔を蒼くする。」

○ 庭にある便所
中から高井が嘔吐する声が聞こえる。

○ 高井の部屋
顔面蒼白の高井が背川と福本の話に耳を傾けている。

背川「俺もびっくりしましたよ」
福本「ほんま、よう書けてましたよね」

背川「阿呆。褒めてどうすんねん」
福本「すいません。でも、あいつ学歴ごまか

してるんやないですか。ほんまは大卒なんですよ、きつと」

背川「そういう問題やないやろ」
福本「すいません。でも、あいつ俺らより先

にデビューできるんですかね？」
背川「それはない。高井さんでさえなかなか

あと一歩いけへんのやからな」
背川「高井の鋭い視線。」

背川「すいません。でも、悔しいな。あんな
福本「ほんまです。ね。いっそのこと磯村さん

が愛想尽かすようなん書いて失敗したらえ
えんや」

高井「その言葉に閃く。
背川「ほんまやな。阿呆らしいお涙頂戴みた

いな下世話なやつをな」
高井「顔に生気が戻る。」

○ 裏庭 翌日

野田「やっ来て来る。薪割りをしてるところへ高井が
野田「なんか御用で？」

高井「脚本、読ませてもらたで」
野田「(照れて) そうでっか」
高井「水臭いやっちゃな。なんで俺に先に読ませてくださいんかったんや」
野田「高井さん、忙しそうやから邪魔したら悪い思て。それに：」
高井「それになんや？」
野田「学のある人やから恥ずかしうて」
高井「変なとこに気イつかうやっちゃな」
野田「でも、映画にするんにはまだ足らへんらしいんですわ」
高井「ま、そうやろな」
野田「やっぱりそう思います？高井さん、頭ええもんな」
高井「それほどでもないで」
野田「高井さん、なんかええ知恵ありません？」
高井「ないこともないけどな」
野田「ありますの？」
高井「まあな」
野田「教えてくださいよ。お願いします」
高井「しゃあないな。インパクトが必要なんやろ？」
野田「そうらしいですわ」
高井「戦場に駆り出される息子を涙をこらえて見送る母親の話とかにするんや。お涙頂戴でいくんや。どうや？」
野田「そんなん節操ないんちやいます？軍隊の広告みたいやないですか」
高井「阿呆、それがええんやないか」
野田「そうやろか？」
高井「映画も商売やで。世の中の流れをちやんととらえんと」
野田「でも、やっぱり高井さんの言うてた人間の理想みたいなもんにこだわらんとあかんのとちやいます？」
高井「気に入らんのやったらええよ。お前のため思て知恵貸してやったらええよ。お前のため思て知恵貸してやってるんや」
野田「すいませんでした。よし！一回、やってみますわ」

高井「そうか！ やってみるか！」
野田「はい。でも、なんで高井さん、自分でやってみませんか？」

高井「俺はその……」
野田「あ、そうか！ これこそ人間の理想ってやつや。脚本家は人格も大事やいうことで

高井「さよ。さすが高井さんや」
野田「すいません。なにからなにまで。よつ

野田「薪割りに精を出す。」
高井「ほくそ笑みながら去って行く。」

○ 連れ込み旅館の一室
公子「うれしそうやね。そんなによかった

高井「あ、よかった。これでうまいことい

公子「は、あ、よかった。他のこと考えてたんや」

高井「大丈夫、進んでないんちやうの？」
公子「そろそろデビュ―してもらわんと、ウ

高井「おおい。先生の耳に入るようなこと

公子「ええやない。自慢の一番弟子が婿になつたらお父さんも喜ぶわ」

高井「気の早いやっちな」
公子「ウチ、勉強なんか嫌いやからな。ほ

高井「あ、あ。が、んばってや」
公子「お父さんがうさから

高井「あ、あ。が、んばってや」
公子「お父さんがうさから

高井「あ、あ。が、んばってや」
公子「お父さんがうさから

と、公子にもうひと勝負。
公子「阿呆な人やね。こつちががんばってどないすんの」
と、言いながら激しく応じる。

○ 大石家の門前 時間経過
泊所長の車が停まっている。

○ 客間
祝樽が飾ってあうる。
泊と磯村が大石と話している。
襖の隙間から覗き見る背川と福本。

○ 高井の部屋
脚本を執筆中の高井のところへ、背川と福本が駆け込んで来る。

高井「なんやおまえら」
背川「おめでとうございます！」

高井「なにがや？」
背川「なにがややないですよ。今、泊所長と磯村さんがデビューー決定の報告を先生にしてましたんやで」

高井「俺、知らんで」
背川「ここでデビューーが決まるって高井さんぐらいしかおらんやないですか」

高井「そこにキヨが来て、
キヨ「高井さん、先生がお呼びでっせ」
高井「え！？」

背川「ほらほら。パシッと挨拶してきてくださいよ」
と、高井の着物のしわを直してやる。

高井「いやー。わかっていたことやけど、いざとなると緊張するもんやな」

背川「あの所長のことやから、今夜は祇園でお祝いですね」

福本「僕らも連れていってもらえますかね」
背川「あたりまえや。芸者呼んでパーツと大騒ぎや！」

○ 祇園にある料亭 夜
陽気な三味の音がかしましく流れる。

○ 料亭の一室
お囃子に合わせて芸者が踊っている。

末席に座る背川、バツの悪そうな顔で隣を気にしてちびちびと飲んでいる。隣を福本もその視線の先を気まずそうに見て

いる。悪酔いしている高井、ムスツとして酒をぐびぐびあおっている。酔いのまわった泊と磯村が芸者と踊り出す。上座では、大石が隣に座る野田に酒をついでいる。

野田、何度も頭を下げ酌を受ける。芸者たち、野田を踊りに誘う。高井「なんだあんな脚本が売れるんや！」

背川「おまえら、あの脚本、どない思った？」

福本「戦場に駆り出される息子を涙をこらえて見送る母親の話やなんて軍隊の宣伝やないですか」

高井「そうですか。節操なさすぎですよ」

背川「高井さん、公開されたら観に行くんですか？」

高井「誰が見るか！あないなもん映画にしようつちゅう阿呆の気がしれん」

泊「なんや！」

高井「者と楽しんでる。脚本に金払う気になつたな。あんなもんで客が来るわけあらへんやないか？」

高井「そやや！」

泊「これやからインテリはアカンや」

高井「世間つちゆうもんを知らん」

泊「知つとるわ。知つとるからあんなもん
当たらん言うてるんや」

泊「これからの客はな、ああいう脚本を求
めとるんや。あれは当たり前で。君ら
もデビュ―したかったら、あいつを見習う
んや」

高井「と、踊っている野田を指す。
そんな真似しよつたら、この国、終わって
しまうで」

泊「同じ阿呆なら踊らにやそんなや」

高井「と、踊る野田たちに加わり、踊る。
泊「同じ阿呆なら踊らにやそんなや」

○ 大石家の裏庭 翌日
高井「井戸から汲んだ水で顔を洗う高井。
悪態ついてもうて」

磯村「無礼講やで。所長はあないなこと根に
もつ人やないから心配せんとき」

高井「磯村さん、俺、まだデビュ―できると
思ってます？」

磯村「えらい弱気になつとるな。のらはのら。
君は君やないか。ちやんと自分の仕事をや
つてたら人は認めてくれるいうもんや」

高井「のらかてこれからは大変やで」

磯村「デビュ―しても、ちやんと続けていく
んがプロいうもんやからね」

高井「一発屋で終わる人もおりますもんね」

磯村「結局は商売やからね。先生かてうかう
かしてられへんよ」

高井「うちの先生のことでですか？」

磯村「あ！そろそろ会社に戻らんと。早よ酒
抜いて脚本に精出しや。期待してるで」

と、磯村、逃げるように去って行く。

高井「俺は俺やな。がんばろ」

○ 大石家の門前 初秋
木々がほのかに赤く色づいている。

○ 大石家の裏庭
高井「のらー！どこやー！」

野田「ここですわ。ここ」

高井「降りてこい！」

野田「暗なる前にこの修理済ませたいんですわ。あがってきてください」

高井「あがるてどないやってあがるんや！」

野田「物置のはしご使うたらええやないですか」

高井「あいつどうやってあがつたんや」

野田「高井、ぶつくさ言いながら物置からはしごを取り出して屋根の上へ。」

野田「脚本、野田圭吾ってなつとるやないか」

野田「？：！ああ、あれですか。ペンネーム、言うやつですわ。平作は百姓みたいな名前

やから変えろて所長が言うもんやから。かつこええ名前つけたる思て」

高井「圭吾は俺の名前やないか！」

野田「そうでしたん？いやー、知らなんだ」

高井「俺がデビューしてもおまえの真似みたいに思われるやないか」

野田「考えすぎですわ。そんなもん誰も気にしませんで」

高井「俺が気にするんや！」

野田「映画、観に行ってくれたんでしょ」

高井「同時に映してる映画のついでや」

野田「それでも嬉しいですわ。高井さん、俺の恩人やからね」

高井「そんなんやあるかい」

高井「知らん。ありがとうございます」

野田「俺、やつと人様に胸はって生きていけ

ますわ。これからもがんばるんで、よろし

うお願いします」

高井「ま、一発屋で終わることもあるからな。

野田「はい。引き締めんと、野田圭吾」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

野田「はい。ありがとうございます」

○ 寺の境内 晩秋

落ち葉が秋の終わりを感させ

る。高井と公子がとぼと歩いて

いる。高井「そろそろ行こうや

ないか」公子「ウチ、今日ちよ

つとしんどいねん」高井「そ

れやったら、なんかうまいもん

食いにしようや」公子「しん

どいんは今日だけやないかも

」高井「どういうこっちゃ？」

公子「しばらく会わん方がええ

思はんよ」高井「なんでも？」

公子「あんた、もうこんなこと

しとる場合やないやろ。デビ

ュー、危ないんちゃうの？」

高井「そんなことないがな。昨

日かて、磯村さんにええ反応も

ろたんやで」公子「でも、採

用てわけやないんやろ」高井

「ま、会社の方にもいろいろ

都合いうもがないと思てる」

高井「来年にはまち

公子「ちよっとおめでたすぎるんちゃう？」
高井「！…あ、おまえ、他に男できたんやな？
そうやろ」

公子「阿呆。ウチのことそんな女や思てるんやな。もうええわ！」

公子、涙ながらに走り去って行く。
高井、追う気も失せ、ふてくされる。

○ 大石家の門前
東亜映画の社長の車が停まっている。

○ 客間

大石「北原を迎えている。

大石「北原社長、あの件はまだ見通しがついていないのですが」

北原「あの件でなんですか？」

大石「私の脚本をそちらで映画化したいという件ですが」

北原「ああ、そんなことありましたな。いや、今日はちよっと別の件で来ましたんや」

大石「別と申しますと」

北原「野田圭吾先生のことですよ」

大石「のらの？」

北原「野田先生を是非、うちの専属にしたいんですわ。それには日映さんと手を切ってもらわんとあきませんやろ。そこをうまくとりもつてもらいたいんですわ」

大石「そういうことですか？」
北原「野田先生はデビュー以来、ヒット連発の快進撃やないですか。日本映画始まって以来の天才脚本家を扱えんようでは世間に顔向けできませんのや。この北原、腹を切る覚悟もありますんやで」

○ 調理場 後日

高井、背川、福本が料理中のキヨに詰め寄っている。

高井「キヨさん、ここ辞めるてほんまか？」

キヨ「ええ」

背川「どっか他にええところあったん？」

キヨ「そないなもんありますかいな」

福本「これからどないすんの？」

キヨ「娘のところで世話してもらお思てますね

んや」

高井「娘さんなんかおったん？」

キヨ「体もガタがきてますさかいな。そろそ

ろ楽しよ思いましてな」

福本「(宙を見て)これから俺らどうやって飯

食うたらええんやろ？」

○ 縁側 後日

床にぞうきんがけをしている高井。

水が冷たい。

○ 裏庭

薪割りをしている背川。

寒さに手がかじかむ。

○ 調理場

慣れぬ様子で料理をしている福本。

焼けた鍋で指を火傷。

○ 居間

大石、高井、背川、福本が食事中。

黒こげの魚の焼き物やおかゆのようなご

はんなど、食べられたものではない。

険悪な雰囲気で長い沈黙が続いた後、

大石「三人寄れば文殊の知恵と言うが……」

高井、背川、福本、大石に注目。

大石「君たち三人集まっても、どこかの野良

猫の足もとにも及ばないようですねえ」

三人、げんなり。

○ 調理場

高井たち、洗い物をしている。

背川「あれはないわ」

福本「のらと比べんでもええやないですか」

高井「おい、聞こえるで」

福本「先生、俺らに八つ当たりしとるんです

よ」

背川「おまえ何か知つとるんか？」

福本「日映が用意してる来年の春の特別興行、先生からのらに変えたんですわ」

背川「嘘やろ」

福本「磯村さんが言うてましたんや」

背川「それで俺らに当たられてもなあ」

福本「のらの脚本の方が先生の倍から稼ぎよるんですよ。会社としたら、のらを選びますわな」

背川「泊所長、のらのこと、野良猫やのうて招き猫や言うてるらしいもんな。うちのの

先生の時代は終わったんやな：「高井、背川の顔を殴りつける。」

背川「なにしますねん！」

高井「すまん：でもなあ：」

背川「：いや、ええですわ：俺も口がすべりすぎました。口すべらす暇あったら、原稿

高井「そうや！俺らもここらで踏ん張りどころやで」

福本「のらなんかに負けてられませんよ！」

高井「そうや！俺らは先生の弟子として立派な脚本書いて、世間をアツと言わせたるんや」

背川「そうですわ。のらが作った流れを俺ら

高井「そうや！その意気やで！」

○ 日映 京都撮影所 門 初冬

○ 廊下

脚本部の札。

○ 脚本部

火鉢の上でやかんが音を立てている。磯村が高井の原稿を読み終え、

磯村「これ、返すわ」

高井「どういう感じに直したらいいですか？」

磯村「わかってないな」

高井「え！どういうことですか？」

磯村「いつまで第二の大石玲司を目指しとるんや」

高井「磯村さん、その線で行け言うてくれてたやないですか」

磯村「世間は動いとるんやで。いつまでも同じとこでじたばたしとつたらあかんよ。世間は大石玲司みたいな脚本、もう求めてないやで」

高井「のらみたいなんがええんですか」

磯村「わかっつとるやないか。今の映画界が必须要としてるんは野田圭吾の脚本なんや。君も右へ倣えせんとな。背川君や福本君もそないしてるとやないか」

高井「どういうことですか！？」

磯村「なんや知らんのかいな。あの二人、ちやんと野田先生を見習うた脚本持ち込んで来よるんやで」

高井「：：」

磯村「今の感じやったら、あの二人のデビューも近いで」

高井「：：」

磯村「所長も君のことまだ怒ってるしな。うまいことやらんと、ウチの会社ではただでさえデビューし難しい身なんやで」

高井「無礼講やないんですか？」

磯村「なんもかんも自分の都合のええように受け取ってたらあかんで」

高井「そんな：」

磯村「デビューしは白紙になった思うて、一から仕切り直し。な」

高井「：はい：」

磯村「そうそう、ペンネーム考えといた方がええで。君、本名やったら野田先生と名前、同じやからな」

高井「：：」

○ 大石家の裏庭

高井「おまえらどさくなつていいる背川と福本が作った流れを交えるんちやうんか？」

背川「いやー、長いものには巻かれるいうことですよ」
福本「そうですね。僕らはそういう風にもやらんとデビュ―なんか無理ですから」
高井「デビュ―できたらええんか？あんな節操のない脚本でええんか？」
背川「理想では飯は食えませんが。俺ら高井さんみたいに才能ないんやから」
福本「それに先生の脚本より、のらの脚本の方がお客さんの反応もええんですよ。お客さんが満足してなんぼの商売やないんですか」
高井「あんなもん無責任に戦争けしかけとるだけやないか。金になるから言うて戦争万歳をまき散らしてええわけないやろ」
背川「俺ら脚本家になりたいだけやないですか」
福本「そういうこと考えるんは政治家の仕事ですわ」
背川「そや。のらは頭ええですわ。ああいうの思いついたんやから」
福本「ほんまほんま。天才やわ」
高井「あれは俺が考え」
背川「へ？高井さんが？」
高井「なんでもないわい！」
背川と福本、首をかしげて顔を見合わせる。

○ 大石家の近所 正月
子供たちが凧揚げや羽根つきをしている。

○ 大石家の門前
注連縄と門松が飾ってある。
高級車が停まる。

○ 裏庭
高井が薪割りをしている。
裏庭
高井「公子：」
派手な晴れ着姿の公子がやって来る。

公子「おめでとうさん」

高井「ああ：おめでとさん」

公子「誰もおらへんの？玄関から声かけたんやで」

高井「先生、まだ寝てはる」

公子「あの二人、どないしたん？あんたの下のお弟子さん」

高井「あいつらここ出たわ」

公子「えらいな。脚本家なるんあきらめたんやな。才能なさそうやったもん」

高井「その逆や。デビュー決まったから出て行ったんや」

公子「やー！あんた先越されたんかいな！」

高井「：：」

公子「そないな怖い顔せんと。正月なんやからもつと明るうおらんと。福も逃げるで」

高井「もう逃げとるわ」

公子「でも、寂しいもんやな。人がおらんようになると」

高井「人だけやない。最近猫も寄りつかんわ。ま、もうのらは懲り懲りやけどな」

公子「船が沈みかけるとねずみも逃げる言うもん。今年ねずみ年や。気をつけんとな。(ねずみを真似て)ちゅうちゅう」

高井「好きにほざけ。それにしてもええべべ着とるな」

公子「そう？」

高井「化粧もえらい派手になつとるやないか。それでも学生かいな」

公子「学生を女にした人の口や思えへんな」

高井「ハッ、ホンマに俺が最初やったんかいな」

公子「藪蛇、藪蛇。お父さんに挨拶に行かんと。ほな、本年もよろしうに」

と、公子、勝手口から中へ入って行く。

○ 水の溜まった桶 後日

高井の部屋の天井からの雨漏りがぼたぼた落ちる。雨漏りは一ヶ所だけではなく、あちこち

に。

○ 廊下

高井「水が溜まった桶を運んで来る。縁側から庭へ棄てる。おや、と庭の奥を見る高井。雨の中、大石が傘もささずに立ち尽くしている。」

○ 庭

高井が傘を手に大石に駆け寄る。

高井「先生！」

大石「高井君か。こんなとこにいては風邪をひくよ」

高井「それは先生のことですよ。さ、家に入りましょう」

大石「今日ね、磯村君に原稿を突き返されたんだよ」

高井「え！？まさか！」

大石「格調だの芸術性だのそんな脚本はもう古いんだと」

高井「：：」

大石「のらを見習えと言うんだよ。この私にねえ」

高井「先生は先生やないですか！なにも見習う必要なんてありませんよ」

大石「君はまだそう思っているのか？」

高井「当然ですよ！」

大石「背川君や福本君のようにデビューできなくてもいいのかい？」

高井「私は大石玲司の弟子ですよ。デビューするなら、先生のような脚本でやってみせますよ！」

大石「ありがとう。本当にありがとう」

高井「そやから先生も自棄にならんといてください」

大石「私はいいい弟子を持って幸せ者ですなえ」

高井「それは私の台詞ですよ。素晴らしい先生につけてこんな幸せなことはありません」

大石「脚本なら、ここで幕といきたいところ
です。ねえ」
高井「人生の幕はまだまだ先ですよ！」
高井と大石、声をあげて笑う。

○ 大石家の門前 時間経過
正月の飾りは外され、あたりは雪景色。

○ 調理場
高井が慣れた様子で料理を作っている。
勝手口から磯村が雪をはらいながら入っ
て来る。

高井「どうも。お久しぶりです」
磯村「えらい雪やで」
高井「先生なら書齋ですよ」
磯村「ああ。で、先生、機嫌どうや？」
高井「ええとはいえませぬね。原稿も進んで
ないみたいやし」

磯村「そうか。蛇の穴に手突っ込む気持ちや
わ。ま、土下座するしかないわな」
高井「どういうことですか？」
磯村「この春の特別興行の原稿、お願いしに
来たんや」

高井「それ、のらがやるやつでっしゃろ」
磯村「磯村、懐から封筒を取り出し、
高井「これ、のらの脚本料」
高井「なんで僕に？」
磯村「君がのらに届けるんや」

高井「話が見えますよ」
磯村「のら、東亜に移りよったんや」
高井「え？ホンマですか？」
磯村「こんなこと冗談で言えるかい。あの阿
呆、デビュ―させられた恩を仇で返しよっ
たんや。嫌なもんやな。人間、最後は金な
んやで」

高井「でも、なんで僕がそれ届けなあかんの
ですか？」
磯村「あいつをウチに押し付けたん、君の先
生やないか。その先生の弟子が始末つける
んが筋いうもんやろ」

と、高井の手に封筒を押し付ける。

○ 雪の嵐山

氷水のような水がきらきら流れる桂川。

○ 大きな洋館の門

表札に野田とある。

雪降る中、高井がやって来る。

豪華な構えに圧倒されそうな高井。

○ 客間

初老の執事が暖炉の火を調節している。

高井が居心地悪そうに座っている。

別人のように身なりを整えた野田が入っ

て来る。

野田「高井さん、お久しぶりです。今日はご

足労いただきました」

高井「ああ、お久しぶり」

野田「連絡くれたら、迎えの車をやりました

のに」

高井「今日はいでやから。ついで」

野田「あれ？お茶、まだやないですか。おー

い、お茶がまだやで」

これまた別人のように洋装のキヨがお茶

を持って入って来る。

高井「え！キヨさん？」

キヨ、上品に会釈を済ますと、お茶を置

いて出て行く。

野田「キヨさん、うちで働いてもらえますね

や」

高井「なんで？」

野田「なんでで、こつちが聞きたいぐらいで

すわ。先生も酷いですな。あないな年寄り、

所払いするなんて」

高井「いや、そないなこと！」

と、説明しようとしたところで、ドアの隙

間かららみつけているキヨと目が合う。

野田「へ？どういうことですか？」

高井「：なんでもない」

野田「おかげでうちは助かってますけど。新

高井「いい女中さん、どうですか？」
野田「それはよかったですね。で、先生は元気にされとりますか？」
高井「ああ。元気やで」
野田「近い内に先生に挨拶に行こうとは思ってたんですよ。でも、とにかく忙しい」
高井「そら、うらやましい限りやな」
野田「先生をうちの会社に移ってもらいたいと思ってるんですよ」
高井「東亜に？」
野田「こんなこと言うのもなんですが、先生、最近、下火やないですか。日映の態度もきついで噂を聞いてるんですよ」
高井「誰かさんのおかげでな」
野田「誰のですか？」
高井「いや、こつちの話や」
野田「先生に恩義のある身としてはです、うちの会社で気を楽にして隠居してもらえたらええなと思ってるんですわ。東亜の社長も僕と先生の二枚看板でいくのも悪くない言うてくれるんですよ」
高井「そりや、先生、喜ぶわ」
野田「その話をいきなり僕がしてもなんやかから、高井さんにそれとら言うてほしいんですよ」
高井「ええで。で、俺はどうなるんや？俺も東亜に世話になれるんやわな」
野田「高井さん、日映がええんとちゃうんですか？」
高井「俺は脚本の仕事ができるんやったらどこでもええよ」
野田「困ったなあ。高井さん、日映に骨埋めるつもりでおる思ってたんですよ」
高井「俺、そんなことひとことも言うたことないで」
野田「東亜もそこまで余裕のある会社やないです。からね。弱ったなあ。高井さんのことまで考えてなかつたですわ」
高井「そんなに弱らんでええよ。先生にはさ

つきのことちゃんど話しとくし」

野田「そうですか！よろしうお願いします」

高井「ああ」

野田「今日は会えてほんまに良かったですわ。

俺、高井さんに会い辛うて」

高井「なんでや？」

野田「高井さん、俺のこと軽蔑してるやろ」

高井「軽蔑なんかしてないで」

野田「俺、節操ない脚本ばかり書いてるや

ないですか。高井さんの考えるような理想

もやってみたいんやけど、なかなか会社が

やらしてくれんですわ」

高井「成功したらしたで大変なんやな」

野田「俺が弱いだけですわ。高井さんみたい

に茨の道を選んでも信念貫くような真似、

俺にはできませんのや」

高井「好きでやってるつもりもないんやけど

な」

野田「高井さんから見たら、俺みたいなの最

低の人間にしか思えへんやろ思て、俺：よ

かった。話せてほんまによかった」

野田、涙ぐんでいる。

○ 野田邸の庭

玄関から出て来た高井が門へと歩いて行

く。

ふと視線を感じた高井、振り返る。

曇ったガラスにぼんやりとした公子の姿。

高井「公子？」

公子らしき女性、部屋の奥へ消える。

高井、扉の前まで戻るが、考え直し、門

を出て行く。

○ 雪道

降りしきる雪の中、高井が歩いている。

橋にさしかかったところで、野良猫を見

つける。

猫、じっと高井を見ている。

高井、雪を丸めて猫に投げつける。

猫に当たる。

高井「高井、声をあげて逃げて行く猫を笑い、

高井「ごまあみいや」
高井「歩こうとすると、足を滑らせ尻餅

をつく。」

高井「クソツたれ！」

尻餅をついて、高井の目の前を、列を

なした侍姿の集団が通り過ぎて行く。

虚ろな顔の彼らは傷を負っており、明治

維新の敗戦志士のようである。

高井「映画の撮影でもしとるんかな」

高井「起き上がる。」

先ほどの集団に目を戻すと、姿はもうな

い。

○ 大石家の門前 その夜

○ しんしんと雪が降っている。

○ 大石の書齋

火鉢の炭を変えに高井が入って来る。

大石「脚本を執筆中。」

高井「大石に声をかけようかと思うが、

やめてそつと部屋を出て行こうとする。

大石「高井君」

高井「なんでしょう」

大石「のらは元気にしていたかい？」

高井「：あ、はい」

大石「私のこと、なにか言っていたかい？」

高井「ええ。先生には世話になった言うてま

した」

大石「そうかい。それは嬉しいねえ」

高井「では、失礼します」

高井「出て行く。」

大石「が、しばらくして再び入って来る。」

大石「？」

○ 大石の書齋 時間経過

大石「神妙な顔で正座をしている高井。」

高井「のらに私に移籍をねえ」

高井「のらはのらで先生のことを考えてのこ

とやと思います」

大石「ふむ」
高井「それを俺はやっかんなんです」

高井「先生にとってもせっかくの機会やいな
のに、俺はのらだけやうて、世話になつ
た先生まで裏切ろうとしたんです。汚い人
間ですよ、俺は」

大石「破門にしてください」
高井「破門にしてください」

大石「俺は弟子失格です」
高井「君はそれで満足するのかい？」

大石「脚本を書きなさい」
高井「え？」

大石「君が汚いと思ったもの。君の脚本に足
りていなかっただよ。はそれなんだよ。人間
の垢というものだよ」

高井「人間の垢：ですか」
大石「そういうものが物語を豊かにするのだ
よ」

高井「なんとなくわかる気がします」
大石「私が君を破門する時があるとすれば、

高井「それは脚本をやめた時だよ」
高井「不肖高井圭吾、背水の陣の覚悟でが
んばります」

大石「私もそうするよ。のらの誘いはお断り
させてもらおう」
高井「いいんですか！」

大石「特別興行の脚本をいいものにして、日
映の連中にもひと泡吹かせてやりたいから
ねえ。私にも意地がある。これぞ大石玲司
というものを叩きつけてやりますよ」

高井「先生！」
○ 高井の部屋
高井「原稿用紙を前に、両目を閉じて自
分に言い聞かせている。両目を閉じて自
分に言い聞かせている。両目を閉じて自

高井「かくデビュールすることを大事なんや：デ
高井「かくデビュールすることを大事なんや：デ

ビュ―した後で理想を追求したらええだけやないか：人間の理想も社会の希望もとりあえずはおあずけや：俺かてのらみたいに売れてしもたら、先生を助けてやることもできるんや」

高井「カッと目を見開き、
「よし！ やったるで」
かじかむ指を息で温めながらもものすごい勢いで脚本を書いていく。

○ 六甲山から見渡す神戸の海 初春
港に停泊している軍艦が見える。

○ 帝塚山映画の門
意気揚々と高井が入って行く。

○ 帝塚山映画 脚本部
脚本部の沼沢（34）が高井の原稿に目を通している。

自信満々で待っている高井。
沼沢「読み終わる。」

高井「どうですか？ いいでしょ、それ」

沼沢「君、本当に大石玲司の弟子なの？」

高井「え！？：そうですが：」

沼沢「こんなの使えないよ」

高井「嘘でしょ。軍隊万々歳のお涙頂戴ですよ、それ」

沼沢「野田圭吾の猿真似だよ、これじゃ」

高井「え？でも、どこもかしこもこんな脚本ばかりやないですか」

沼沢「だから困るんだよ。これ見たまえ」
と、後ろの棚に積まれた脚本の山を指す。

沼沢「これ全部、その猿真似だよ。君のより面白いのもあるけどね。金出して映画にするようなのは一本もないんだよ」

高井「：：」
沼沢「野田圭吾の作品にはそれはそれでドラマがあるんだよ。観客もバカじゃないんだよ。軍隊の広告みたいな映画を手放して喜んでるわけじゃないんだ」

高井「……」
沼沢「君の脚本には心がないんだよ。心が」
高井「……」
沼沢「第二の野田圭吾になろうとする前に、自分らしい脚本を書こうとする意志が大切なんだよ」
高井「僕のは人真似ですか？」
沼沢「文章が書けるからって物語を書けるわけじゃないからね。人生経験積んで、勉強しなおしておいで」

○ 六甲山から見渡す神戸の海 夕方

○ 神戸の繁華街にある居酒屋
高井「かなり酔いが回っている。
店の飼い猫がなついて寄っている。」

高井「のらか：あっち行け」

と、箸で叩いて追い払う。

猫、主人のもとへ逃げ込む。

主人「お客さん、かわいそうやないですか」

高井「かわいそうなんはこつちや。どいつも

こいつもものらばっかりかわいがりよる」

主人「話にならんと、他の客の相手をする。」

高井「先生だけや。先生だけが俺のことわか

ってくれてるんや：先生が自分を貫いて脚

本書いてるのに、俺はのらの真似なんかし

て阿呆やなあ：俺、なにがやりたいんやろ

：「」

後ろの女性客のやりとりが耳に入る。

客A「野田圭吾の新作、いまいちやったな」

聞き耳を立てている高井、にんまり。

客B「野田って大石玲司の弟子やったんやろ」

客A「一番弟子やったらしいわ」

高井、ムツとする。

客B「師匠が師匠やもん。弟子もしれとるわ」

客A「ま、それでも野田の方がええけど」

客B「弟子にあれだけ差つけられたらお師匠

さんも憐れなもんやな」

客A「弟子いうても一人やないわな。あれだ

け落ちぶれてもまだ金魚のふんみたいつ
いてる弟子もまだおるんやろか」

客 B 「そんな阿呆おるかいな」

客 A 「そやな。おったらツラ見てみたいわ」

高井 「大きな声で笑う客たち。
高井、堪忍袋の緒が切れて、
「黙れメス猫！ 拝ましたるわい！」

○ 繁華街の通り

手酷く殴られた高井が体を引きずるよう
に歩いていく。

行き交う人々が皆、幸せそうな顔に見え
てならない。

窓硝子に映る自分の冴えない顔を見て、
ため息をつく。

高井 「俺、いつからこないなってもうたんや
ろ？」

高井 「窓硝子に野田の姿が浮かぶ。
「のらや！ のらが現れてからや。きつと
そうや。くそ！ のらなんぞ死んでもう
たらええんじやい」

窓硝子には更に公子、背川、福本、キヨ、
磯村などが浮かび上がる。

高井 「そうなたら公子も道連れや。背川も
福本もみんな死んでもうたらええんじや
い！」

！どいつもこいつも死んでまえ」

戦闘機のエンジン音が聞こえてくる。
窓硝子に米軍の戦闘機が映る。

高井、驚いて振り返る。

戦闘機から焼夷弾が落とされていく。
さつきまで幸せそうだった人々が恐怖に
顔を歪めて逃げ惑う。

あつという間に神戸の街が炎に包まれる。

○ 高井の部屋 未明

高井の部屋 未明
脚本を書きながら眠ってしまっていた高
井が目覚めます。

高井 「夢か？」

高井、書いていた原稿に目を通す。
顔を曇らせ、原稿を丸めて放り投げる。

○ 裏庭
高井、井戸で水を汲み、顔を洗う。
爽やかな顔つきの大石がやって来る。

大石「高井君、おはようございます。先生、今日は早
高井「おはようございます。先生、今日は早
いですね」

大石「久しぶりに徹夜したよ」
高井「それはおつかれさまでした」
大石「いやいや、気分爽快だよ。新作がよう

やく完成した」
高井「出来たんですか！」
大石「ああ。今朝は空気がいいねえ。若返っ

た気分だ」
高井「拝読させていただけますか」
大石「もちろんだとも」

○ 大石の書斎
高井、脚本を読み終える。

大石「どうだい？」
高井「：：」
大石「言葉が出ないほどいいかい？そうだと
う、そうだろう。久々の改心の出来映えだ

よ」
高井「なんですですか？」
大石「なにがだい？」

高井「こんな、のらの猿真似やないですか」
大石「高井君、口が過ぎるんじゃないかね」

高井「どう言われようと言わせてもらいます
よ。これのどこが大石玲司の脚本なんです
か。こんな背川や福本の本と変わらんや

ないですか」
大石「：：」
高井「日映の連中にひと泡吹かせるんやなか
ったんですか！こんなもん見せたら、一生

大石「：：」
高井「文学性はどこにいったんですか！人間
の理想はどこにあるんですか！こんなもん

大石「：：」
戦争の宣伝やないですか！

高井「こんなもん人殺しを美化してるだけや
 ないですか！」
 高井「原稿を大石に叩きつける。
 大石の足もとバラバラに落ちる原稿。」
 大石「そんなもんで誰も相手してくれん
 だよ：映画なんて、所詮、世の中の流れに
 合わせる以外にないんだよ：」
 高井「先生ほどの人がそんな真似する必要な
 いやないですか。先生は映画を芸術やて言
 うてたやないですか。」
 大石「君はいつまでそんな青臭いこと
 を考えとるんだ。」
 高井「：」
 大石「だから背川や福本にさえ抜かれるんだ
 よ。あの二人を見たまえ。独立して立派に
 やつているじゃないか。」
 大石「高井、机の上にある文鎮が目にとまる。
 わいがつてやつていたものを。それをなん
 だ、批難ばかりしよつて。」
 高井「：」
 大石「君など雑用係じゃないか。いや、雑用
 の方さえのらに敵わないものな。牛尾やキヨ
 の方がよほど世の中の役に立つというもの
 だ。」
 大石「笑いながら高井に背を向け、バラ
 バラになつた原稿をまとめる。」
 高井「机の文鎮を手取る。」
 大石「高井、高井に背を向けたまま、
 大石「君は野猫以下の泥棒猫だからな」
 高井「！？」
 大石「人の娘と隠れてこそそしておいてな
 に今更：」
 高井「知ってたんですか」
 大石「自分だけが賢いって思っているんだろ
 うが、君だけだよ、なにも知らないのは」
 高井「文鎮を机に戻す。」
 大石「高井、高井の方へ振り返る。」
 大石「弟子の中では出世頭だと思つて見逃し

てやっていたんだよ。ま、それものらにと
って代わられてはいるんだから世話ないよね
え。私としては彼のような甲斐性のある人
間でほっとしてはいますけどねえ」

高井「……」

大石「君は私がのらの猿真似だと言うけれど、
君こそ私の猿真似じゃないか。そんな男に
批難される筋合はないよ」

高井「……」

大石「所詮、猿真似しかできないんだ。君も
つまらない意地を張らずに、背川たちのよ
うにのらの真似をしてデビューしてみせれ
ばいいんだよ」

高井「……」

大石「ま、出来ればの話だけどねえ」

高井「！」

大石「飼いだに手を噛まれるというけれど、
君は犬以下の畜生だ。尻尾振ってご機嫌と
りをするぐらいの真似しかできんだろう」

ハハハと大石、大きく嘲笑う。

高井、文鎮をつかみ、大石の頭に一撃。

大石の頭から血が噴き出す。

高井の顔に血が飛び散る。

大石、ぼたんと後ろに倒れる。

高井、じつと見ている。

両目は見開き、大きく開いた口から舌が

突き出た大石の死体。

高井、動じることなく死体を見つめてい

る。

どうしたものかと顔をなでつける。

○

裏庭

高井が大石の死体を担いで来る。

高井、死体を置くと、桶に井戸の水を汲

み、顔についた血を洗い流す。

もう一度、水を汲み、ごくごくとうまそ

うに飲み干す。

ひと息ついたところで、大石の死体を抱

え、頭から井戸の中へ放り込む。

ふうと汗をぬぐい、水を飲もうと桶を手

にとるが、もう残っていない。
水を汲みかけるが、井戸の底の大石を覗
き込み、その気をなくす。

○ 高井 「阿呆やな、俺は……」
高井、煙草を取り出し、一服。

ほっとした瞬間、屋根の上からにやあと
いう声。

○ 高井 「！」
声のした方を見るが、猫の姿はない。

○ 大石の書斎
血を洗い流し、着替えた高井、封筒に遺
書と表書きをする。

○ 庭
高井、花壇の土を掘り、凶器の文鎮を隠
す。

○ 裏庭
高井、焚き火を起こしている。
大石の原稿と血のついた服を燃やす。

○ 火葬場の炉の扉
扉が開き、焼き終わったお骨を引き出す。
喪服姿の公子がお骨を骨壺に入れる。
公子を支えるように隣に野田。
背川、福本、キヨ、磯村、泊など参列者
たちの中に高井の姿もある。

○ 大石家の門前 夜
花輪が並んでいる。

○ 広間
大石の仏前で食事をとる参列者たち。
喪主席で肩を落としている公子。
野田が参列者たちに酒を注ぎもてなして
いる。

背川、福本と並んで座る高井。
背川 「俺、不義理でしたわ。もうちよつと顔
見せに来ておくべきでした」

福本「僕も責任感じますわ」
高井「おまえらが気にすることないよ。一番悪いんは一緒に住んでたこの俺や」
背川「高井さん、そんなこと言うたらあきませんわ」
福本「そうですね。最後の最後まで先生に尽くしてたの高井さんやないですか」
高井「そんなことないで」
背川「いやいや。先生の遺書に書いてあったやないですか」
福本「いくら脚本に行き詰まったからいうて、自殺せんでもええのに！」
背川「福本！（公子を見て）聞こえるで」
福本「すみません：お嬢さんの面倒はのらが見るらしいですな」
背川「ええなあ。なんもかんものらの独り占めかいな。でも、あの二人いつの間にかできたんやろな」
福本「鈍いですね。僕、気づいてましたで」
背川「まさか、ここにおった時からか？」
高井「！？」
福本「そうですね。僕、ピーンときてましたもん」
背川「おまえ、そういうとこだけは鋭いな。いつそ恋愛もん書いたらええやないか」
福本「なるほどなあ。戦争と悲恋：これは当たりそうやな。あとで磯村さんに相談してみよ」
背川「俺もそのネタもろてええか？」
福本「当てたらお返ししてくださいよ」
背川「そのがめつき、すっかりプロやな」
福本「当然ですよ」
背川「話題に入りづらい高井を察し、酌をしつつ、」
背川「すいません」
高井「謝ることないよ。二人ともがんばってるみたいで俺も嬉しいがな」
背川「なんとか底辺の方にはりついてるだけですわ」
高井「なに言うてるねん。立派なもんや：先

生も二人のこと褒めてたもんなあ

福本「ほんまですか！」

背川「ありがたいなあ。で、高井さんはこれ

からどうしはるんですか？」

高井「実家の仕事を手伝おと思ってるんや」

福本「脚本やめるんですか？」

高井「やめはせんけどな。ま、趣味やな」

背川「書けたら読ませてくださいよ」

福本「そうですね。僕、高井さんの脚本、好

きなんですよ」

高井「機会があつたらな」

背川「そないな寂しいこと言わんと、定期的

に会いましょうや。俺ら大石玲司の兄弟弟

子やないですか」

福本「そうですね。僕、高井さんのこと、ほ

んまの兄貴のよう。に思ってたんですから」

高井「そうやな。そうさせてもらおか」

背川「僕ら仲良うやつてた方が先生の供養に

なりますわな」

福本「それが一番のご恩返しにもなりますし

ね」

高井「せやな」

三人、大石の遺影に献杯する。

高井、飲み干した後、視線に気づく。

野田が高井をじっと見ている。

問いかけるようなその視線。

目をそらしたくないが、そらせない。

戦闘機のエンジン音が聞こえてくる。

○ 戦場と化した神戸の街

戦闘機から焼夷弾が落とされる。

恐怖に顔を歪めて逃げ人々。

あつという間に街が炎に包まれる。

その光景がモニター画面に映し出される。

ここは都内の映画撮影所内にあるスタジオ

オの中。撮影者たちの中に年老いた高

井（76）がいる。

○ スタジオの外

春の陽光が心地よい。
煙草を吸っている高井。

若い女性スタッフがスチール缶のコーヒ
ーを持って来る。

女性「高井先生、いかがですか？」

高井「ありがとうございます。いただくよ」

女性がふたを開けて高井に渡す。

女性「高井、コーヒーをひと口。」

女性「先生、サイン、いただいてもいいです
か？」

高井「いいですよ」
女性「表紙に『のら』と印刷された脚本
を差し出す。

高井「慣れた手つきでサインする。
女性「ありがとうございます」

高井「どういたしまして」

女性「お伺いしたいことがあるんですが」

高井「なんでしょう？」

女性「今、撮影している（脚本を見せ）この
『のら』は先生の自伝じゃないかという噂

があるんですが、本当なんですか？」

高井「君はどう思いますか？」

女性「（笑って）私はフィクションだと思って
いますよ。じゃなきや、先生、人を殺した

ことになるじゃないですか」

高井「そうですよね」

女性「やっぱり噂は噂ですね」

高井「：：」

女性「私、先生みたいな脚本家になりたいん
です」

高井「ほう。私みたいなね：：」

女性「脚本家に大切なことってなんですか？」

高井「世の中の流れを読むということでしょ
うかねえ」

女性「なるほど」

高井「いや、嘘ですよ」

女性「え？」

高井「それがわかれば苦労しませんよ」

女性「先生ほどの人でもですか？」

高井「この年になっても、私はなにもわかっ
たことないですよ」

女性「なるほど」

高井「いや、嘘ですよ」

女性「え？」

高井「それがわかれば苦労しませんよ」

女性「先生ほどの人でもですか？」

高井「この年になっても、私はなにもわかっ
たことないですよ」

ちやいないんですよ」

○ 京都駅
の車から出て来た高井が案内とともに迎え

○ ホテルのロビー
高井が入って来る。

ソファに座っていた二人の老人が嬉し
そうに高井のもとへ。

高井、それぞれを指差し、
高井「背川、福本」
高井「高井さん、僕は福本ですよ」

背川「嫌やな、こっちが背川ですよ」
高井「ごめん。ごめん。もうずっと会ってな
かつたから」

高井「久しぶりですね」
高井「何年ぶりやろね」
福本「あ、関西弁に戻った。昔の高井さんと
同じや」

高井「そうか。もう東京で暮らしてる方が長
いからな」

福本「お元気そうですね」
高井「おかしなものでないよりです」

背川「おかしな顔合わせられんやからな」
背川「同じ脚本家やいうても、高井さんは世
界のタカイですもん」

福本「そうですわ。ノーベル賞やて週刊誌に
書かれてましたで。あれ、ほんまですか」
高井「噂や。噂。俺も週刊誌で知ったもん」

福本「なんや」
背川「相変わらず噂の好きなやつちやなあ」
背川「若き頃と変わらぬ様子でハハハと声をあ
げて笑う三人。

背川「でも、会えてほんま良かったですわ。
先生の命日に脚本作品を特集上映するから
ゲストに呼ばれた時は、高井さんに会
えるかもって思ってたに引き受けましたん
やで」

福本「僕もですよ」

高井「俺もやで」

背川「のらもゲストにつて主催者の人らが連絡とろうとしたけど、消息がつかめんかつ

高井「やっぱりおまえらものらのこと知らへんのやな」

福本「戦争で死んだとか、戦争の後、アメリカに渡って商売始めたとか。そんな噂ばかり耳にしましたけど、結局、どないなつ

背川「ふらりと現れて、ふらりと消える。ま、たんか誰も知りませんねんで」

高井「あいつらしいいうたらあいつらしいな」

背川「高井さん、変なこと言わんといてくださいよ」

高井「俺、あの頃のことたまに思うんや。記憶にはあるけど、ほんまに体験したことな

福本「それ、俺もわかりますよ」

背川「おかしな時代でしたもんな」

福本「悪い夢みたいない時代でしたなあ」

○ 鴨川のほとり
高井、背川、福本の三人が想い出話に花を咲かせながら歩いてる。

○ 上賀茂神社の前
高井一行が通り過ぎて行く。

○ 住宅地の一角
背川が指差した方へ歩いて行く。

○ その先
背川「ここですわ。先生の家があったところ

！」
高井「ここですわ。先生の家があったところ

高井「俺たち、唾然となる。目の前にはラブホテルが立っている。若い恋人たち、老人たちが目に入らない

かのように中へ入って行く。
高井、両手を合わせ、墓前のように拝む。
背川と福本も倣って拝む。

○ 映画館の中
高井、背川、福本、観客と一緒に映画を
見ている。

○ 時間経過
ステージ上に座り、客席からの質問に
応えている高井、背川、福本。

質問 A 「当時、戦争を支持する世間の流れに
大石先生はその生命まで賭けて反対したと、
ある映画雑誌で読みました。背川先生と福
本先生は師である大石先生の教えから外れ
る形でデビューすることには抵抗はなかった

背川 「いい気分ではなかったですね」

福本 「まあ、そういう時代でしたから」

質問 B 「戦争の後押しをしたことに対する責

任は感じられていないのでしようか？」

背川 「感じていないと言えば嘘になるでしょ
うが、あの頃はみんな同じでしたから」

福本 「私たちだけの責任とも考えられませんが

し、なんとも」

質問 C 「高井先生は大石先生の意志を継ぎ、

戦意高揚に力を貸すことなく、戦後、反戦

と平和を謳い上げることと素晴らしいデビ

ューを飾られました。その時のお気持ちは

いかがだったのでしょうか？」

高井 「時代の合ったというだけで」

質問 D 「高井先生はどうか？」

質問 D 「高井先生はどうか？」

高井 「え！？」

野田 「高井さんはい、なんで脚本、書こうと思

ましたんや？」

野田 「高井さんはい、なんで脚本、書こうと思

ましたんや？」

高井「：のら：」
背川と福本、驚いて高井を見る。
野田、くるりと背を向け、ひょいと劇場の外へ出て行く。
高井、思わず後を追う。
背川「た、高井さん！」

○ 映画館の外 夕方
前に国道が通っており、車が激しく行き交っている。
映画館から高井が出て来る。
照らしつける夕陽に目が眩む。
目が慣れてきた高井、周囲を見回す。
野田の姿はない。
にやあと猫の鳴き声。
声がした方を見ると、映画館の入口の屋根に野良猫がいる。
猫がサツと高井の方へ飛び降りる。
驚いた高井、かわそうと四つん這いに。地面に手をついたまま、こちらをじっと見ている猫と目が合う。
ちようどその時、轟音をあげてジェット機が頭上を飛んで行く。
その先には沈みゆく夕陽。
その光景は、若き日の高井と野田が目にした日没の戦闘機と似ている。
二人の声が聞こえてくる。
野田「でもええんですかね？」
高井「なにがや？」
野田「戦争を応援するようないな映画作って。もう俺、えらいことしたんやないかって。昨日も寝れなんだよ。」
高井「なんや、おまえらしないな。しようもないことや、おまえらしないな。しようもないことやないか。」
野田「あたりはゆっくりと夜の闇に覆われていく。」

【終】